

伊達政宗の手紙

DATE MASAMUNE'S LETTERS

小 池 一 行*

In the Document Department of the Imperial Household Agency, among the Katsura no Miya Bon, there is a document called “Letters of Date Masamune” (registration no. 桂 - 1254). The following nine letters, addressed to Hachijo no Miya (who was to become later Katsura no Miya), i.e. to Ikushima Hidemori, who died at 73 on November (double month) 16, 1639 (the 16th year of Kan'ei), are also included.

1 September 19	Sendai - Chunagon	Origami
2 April 21	Matsudaira - Mutsunokami	Origami
3 January 14	Matsudaira - Mutsunokami	Origami
4 January 6	Matsudaira - Mutsunokami	Origami
5 January 7	Sendai - Chunagon	Origami
6 July 29	Matsu - Mutsunokami - Masamune	Tategami
7 April 7	Matsudaira - Mutsunokami	Origami
8 July (double month) 18	Sendai - Chunagon	Tategami

*KOIKE Kazuyuki 宮内庁書陵部首席研究官、日本大学文理学部非常勤講師。日本大学文理学部卒。
編著書に『図説宮中行事－近世宮中の調度－』（同盟通信社）、『松平文庫影印叢書』（新典社）など。

9 August 9

Matsu - Mutsunokami

Tategami

I analyse letter no.2 and letter no.7, esteemed, on basis of internal evidence, to have been written in 1625 (the 2nd year of Kan'ei). I try to bring to light something of the relationship between Date Masamune (died at 70, in Edo at Sakuradatei, on May 24 1636 – 13th year of Kan'ei), most important *daimyo* in Tohoku, and the first generation Katsura no Miya, Toshihito Shinno (passed away at 51, on April 7 1629 – 6th year of Kan'ei). Toshihito Shinno had been already received from Hosokawa Yusai the *Kokindenju* and was the leading person on the cultural stage of the time.

はじめに

現在も京都市右京区の桂川の畔に「桂離宮」が建っています。この離宮（別荘）を創始されたのが、八条宮（後の、桂宮）初代の智仁親王^{としひと}です。智仁親王に関わる書籍が宮内庁書陵部に所蔵されています。書陵部所蔵の古典籍の中で、「桂宮本」と称される蔵書群がそれです。今回は、その中より『伊達政宗書状』（書陵部函架番号、桂-1254）と書名される一部を採り上げることといたします。本書の現状は、卷子装で九通の書状が継がれています。すなわち、

- 一、九月 十九日 仙台中納言（折紙）
- 二、四月二十一日 松平陸奥守（折紙）
- 三、正月 十四日 松平陸奥守（折紙）
- 四、正月 六日 松平陸奥守（折紙）
- 五、正月 七日 仙台中納言（折紙）
- 六、七月二十九日 松陸奥守政宗（竪紙）
- 七、四月 十七日 松平陸奥守（折紙）
- 八、閏七月十八日 仙台中納言（竪紙）
- 九、八月 九日 松陸奥守（竪紙）

このうち、内部徴証などから寛永二年（1625）の書状と考えられる二と七の二

通を採り上げ、日付に従い七、二の順にみることに致します。

—

今回採り上げる手紙に登場する人物について、その略歴を示します。

まず、手紙の実際の受け手は、智仁親王です。親王は、天正七年（1579）正月八日に、正親町天皇の皇子^{さねひと}誠仁親王の第六皇子として誕生し、幼名を胡佐磨と称します。天正十八年に豊臣秀吉より三千石を献ぜられて、八条宮を創立します。翌十九年正月二十六日に親王宣下を受け名を^{としひと}智仁と賜ります。同二十九日に元服し、式部卿に任ぜられます。慶長五年（1600）に細川幽斎より『古今伝授』を授かっております。智仁親王は生涯に二度、江戸へ下向されています。最初は、元和三年（1617）正月十九日に京都を出発し、三月十四日に江戸に到着します。時に親王は三十九歳です。二度目は、寛永二年（1625）三月十一日に京都を出発し、同月二十三日に江戸に到着しております。時に親王は四十七歳です。今回の江戸下向の主たる目的は、元和九年（1626）七月二十七日に、父秀忠の譲りを受け三代将軍に就任した徳川家光（慶安四年（1651）四月二十日没四十八歳）を祝賀するものでした。智仁親王は、江戸城に於ける諸行事を済ませ帰洛するにあたり、日光に造営された家康の廟所、すなわち、東照権現社への参詣を思い立たれました。その日程は四月十六日に江戸を出発し、十九日に日光に到着します。翌二十日に東照権現社に参詣しています。二十一日に日光を出発し、二十四日には江戸に帰着しています。『伊達政宗の手紙』は、この期間に出されたと考えられます。

では、次に手紙の書き手である伊達政宗の略歴について、『寛政重修諸家譜』などを参考にしてみますと次のようになります。

永禄十年（1567）八月三日、伊達輝宗の長男として米沢城に誕生します。幼名は梵天丸と称しました。天正五年（1577）元服し、藤次郎政宗と名乗ります。これは伊達家中興の祖、大膳大夫政宗を襲名したものです。同十二年（1584）十月、家督を相続して、第十七代の藩主となります。同十三年に、従五位下美

作守に叙任され、同十九年に侍従兼越前守になり、羽柴姓を許されます。慶長二年（1597）従四位下右近衛権少将に叙任され、同十三年（1608）陸奥守に任じられ、松平姓を許されます。元和元年（1615）正四位下参議に。寛永三年（1626）八月十九日に、従三位権中納言に任ぜられます。同十三年（1636）五月二十四日に、江戸桜田邸において七十歳で死去します。

この手紙の直接の宛名、生嶋秀盛の略歴について『地下家伝』によってみておきましょう。永禄十年（1567）長治の次男として誕生します。寛永三年（1626）六月二十六日従五位下に叙され、同日宮内少輔に任ぜられる。同十一年四月十一日従五位上に叙され、壱岐守を兼ねる。同十五年十二月二十三日従四位下に叙される。同十六年（1639）閏十一月十六日七十三歳で死去します。

二

では、資料1に示しました第七紙をご覧ください。料紙は、楮を主原料に漉かれる「杉原紙」で、縦36.0、横53.7センチメートルです。この紙を横長に用います。まず、折り目を下に二つ折りにします。このような料紙の用い方を「折紙」といいます。表面を「本紙相当部」、裏面の前半部を「札紙相当部」、残りの部分を「包み紙相当部」といいます。本紙部分の書き出しは、端（料紙に向かって右）から手のひら分をあけます。これを端造りといいます。では、第七紙を読むことといたします。最初の余白部分が端造りの箇所、袖ともいいます。ここに記されている「以上」は最後に書きまきりがありますので、最後に読みます。

「急度飛脚^{きつと}を以て申し入れ候、（この空画は欠字といい次に書かれる人物に対する敬意を表す書札礼上の方法です。）

八条宮様江戸へ御下向之由、此中^{このうち}、在所に於いて承たまわり及び候、然者遠^{しからば}境故、貴老迄も御尋ね申さず候、然^{しかるところこのほど} 処^{ごしやさん} 今程、日光へ御社参之由、拙者儀在所十一日に罷立^{まかりたち}、昨夕に到り、宇都宮へ罷着^{まかりつき}候、江戸へ御帰府之剋、萬々申伸ぶべく候、〈本紙相当部〉

御前、然る可様に頼み入り候、恐惶謹言

松平陸奥守

卯月十七日（花押）〈礼紙相当部〉

生嶋宮内少輔様 人々中〈包み紙相当部〉

以上〈本紙相当部、袖書き〉

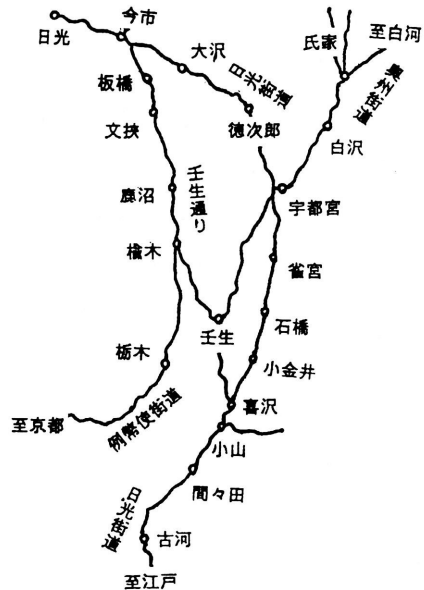
さて、伊達政宗はこの度の智仁親王の江戸下向については、既に承知しておりましたが、自身が在国のため、お目見えは断念していたようです。江戸藩邸からの連絡便で、智仁親王が、江戸出府中の旧知の大名達との交流の様子を聞くたびに、どんなにか残念に思っていたことでしょう。四月になったある日の便で、智仁親王の最新の動静がもたらされました。それは、智仁親王が、寛永二年（1624）四月十日に、江戸城に再度登城して家光への祝賀を済ませた後、帰洛を前に、日光東照社への参拝を思い立たれたというものでした。この情報ほど政宗を喜ばしたものはなかったでしょう。政宗は智仁親王にお会いするために、早速に行動を起こします。四月十一日に仙台北城下の北目宿を出立しております。

三

ではここで、東北地方への当時の道筋についてみておくことといたしましょう。江戸幕府の道中奉行が支配する五街道の一に、「奥州道中」があります。これは江戸千住宿（東京都足立区）から宇都宮を経由して福島白河宿（福島県白河市）までですが、白河以北もその延長路とみて、津軽^{みんまや}の三厩、青森県東津軽郡）までを「奥州街道」と称し、勘定奉行の管轄とし、沿道の各藩にその支配を任せました。仙台藩では、この道を仙台で二分し、仙台以南を「江戸道中」、仙台以北を「奥道中」と呼び慣わしています。では、伊達政宗とともに「江戸道中」を上ることといたしましょう。

北目宿－長町－中田－増田－岩沼^{つきのき}－槻木^{ふなばさま}－大河原^{かながせ}－金ヶ瀬－宮－白石^{さいかわ}－斎川^{こすごう}－越河（以上、宮城県）－貝田^{かいだ}－藤田^{こおり}－桑折^{せのうえ}－瀬上－福島－清水町－

若宮－八丁目－二本柳－由井町－二本松－北杉田－南杉田－本宮－高倉－日和田－福原－郡山－^{こはらだ}小原田－^{ひでのやま}日出山－^{きゆうらいし}笹川－須賀川－^{おほわぐ}笠石－^{ふま}久来石－^{おおたかわ}矢吹－^{こたかわ}中畑新田－^{ねた}大和久－^{ふま}踏瀬－^{おおたかわ}太田川－^{こたかわ}小田川－^{ねた}根田－白河－白坂－境明神（以上、福島県）－^{こえはり}芦野－^{なべかけ}越堀－^{おおたはら}鍋掛－大田原－^{さくやま}佐久山－^{きつれがわ}喜連川－氏家－白沢－宇都宮（以上、栃木県）となります。政宗は書状に、四月十六日の夕刻には宇都宮に到着したと記しております。今日のJR線、仙台～宇都宮間の営業距離数は242・3キロメートルです。



日光付近道筋略図

政宗は六日間でまさに駆け上ったのでしょうか。十七日には本書状を飛脚に託しております。

では、智仁親王の方はどのような行程だったのでしょうか。四月十六日に江戸の宿舎を出発しております。江戸から宇都宮までは、「奥州道中」と重なります。宇都宮から今市を経由して日光に至ります。日光は、徳川幕府の創始者（家康）の廟所が設けられたことにより、特にこの道筋を「日光道中」と称されています。日光まで、親王と同道いたしましょう。千住（東京都足立区）－草加－越ヶ谷－粕壁（春日部）－杉戸－幸手－栗橋（以上、埼玉県）－中田－古河－野木－間々田－小山－新田－小金井－石橋－雀宮－宇都宮、ここで「奥州道中」と別れます。徳次郎（上・中・下の三宿）－大沢－今市－鉢石（以上、栃木県）に至ります。この間の営業距離数は150・0キロメートルです。智仁親王はこの間に三泊して、四月十九日には日光に到着しております。智仁親王が日光へ到着されるまでに、宇都宮で記された伊達政宗の四月十七日附けの書

状が届けられたと思われます。家司の生嶋秀盛から披露された書状は、上記のような、政宗の熱意が直接伝わって来るような書状です。智仁親王は、どのようなお気持ちでこの手紙をご覧になられたのでしょうか。二十日に東照宮をご参詣なされ、『桂光院宮道之記及和歌』によりますと、

楽しめる世にも有かな 東より照らす光の神の恵に
と、徳川家康を賛える和歌を詠まれております。二十一日に日光を立ち、二十四日に江戸に帰着されております。

四

では次に資料2を読むことと致します。この第二紙も、当時 ^{ふどころかみ}懐紙として良く用いられた、楮を原料にした「杉原紙」です。縦37.8センチメートル、横54.0センチメートルを折紙とし、その表裏に記されています。

鹿沼より之御返書披見令め候、(この改行は、「平出」といい、次に記される人物に対する敬意を表す書札礼上の方法です。)

八条宮様直に御帰洛成被る之由、^{おそれながら}恐乍^{おのこり}千萬御残多く存ぜ令め候、^{おみまい}御見廻と為て、使者を以て申入候、然る可き様、御取成し、頼み奉り候、来年(この箇所、欠字)御所様御上洛に於いて者、京都にて御意を得可く候、^{はたまた}将又、南都の酒両樽并鶴一、〈以上、本紙相当部〉子籠の鮭十尺進上致し候、猶、此の使者申宣可候、恐惶謹言

松平陸奥守

卯月廿一日(花押)〈以上、礼紙相当〉

^{なおもって}尚以然る可き様御取成し^{まかせ}任入り候、以上〈本紙相当部、袖書き〉

生嶋宮内少輔様 人々中(包み紙相当部)

とあります。親王が日光への往路として用いられたと思われる「日光街道」を紹介しましたが、「鹿沼」の地名はその道筋には含まれておりません。徳川家康が、元和二年(1616)四月十七日に七十五歳で薨ぜられました。当初その廟所は、駿河の久能山に設けられました。その後、江戸幕府は日光の地に新たに

八雲宮様直ニ被成
 御掃洛之由、乍恐
 千萬御残多令
 存候、為御見廻、以
 使者申入候、可然様
 御取成奉頼候、来
 年、御所様於
 御上洛者、京都二而
 可得御意候、將又、南都
 酒両樽并鶴一
 申上
 御取成奉頼候、来
 年、御所様於
 御上洛者、京都二而
 可得御意候、將又、南都
 酒両樽并鶴一

(第二紙 折紙 表)
 【万葉仮名の字母】
 尚以可然様御
 取成任入候、以上
 從鹿沼之御返書
 令披見候、
 八条宮様直ニ被成
 御掃洛之由、乍恐
 千萬御残多令
 存候、為御見廻、以
 使者申入候、可然様
 御取成奉頼候、来
 年、御所様於
 御上洛者、京都二而
 可得御意候、將又、南都
 酒両樽并鶴一

(翻刻文)
 尚以、可然様御
 取成任入候、以上、
 從鹿沼之御返書
 令披見候、
 八条宮様直ニ被成
 御掃洛之由、乍恐
 千萬御残多令
 存候、為御見廻、以
 使者、申入候、可然様、
 御取成奉頼候、来、
 年、御所様於
 御上洛者、京都二而
 可得御意候、將又、南都
 酒両樽并鶴一

(花) 日一廿月卯
 申上
 御取成奉頼候、来
 年、御所様於
 御上洛者、京都二而
 可得御意候、將又、南都
 酒両樽并鶴一

(花) 日一廿月卯
 申上
 御取成奉頼候、来
 年、御所様於
 御上洛者、京都二而
 可得御意候、將又、南都
 酒両樽并鶴一

廟所を造営することを決定しました。そのために、江戸から日光までの道筋が整備されました。「日光街道」もその一つです。五街道の一つとして既にありました「奥州街道」を整備し、その途中の宇都宮から西へ日光まで延伸させまして、特に、この日光－江戸間を「日光街道」と称させております。この他には、「日光街道」の小山宿の北方の喜沢村（小山市）から北西に分岐し、城下町である壬生宿を経由し、楡木宿（鹿沼市）で例幣使街道と合流し、更に北上して今市宿の手前で再び日光街道に合流する「壬生通り」があります。この道筋も、日光廟所造営の元和二年の当初より、日光街道の一部として整備されております。また、途中で合流する、例幣使街道は、家康の廟所が日光に完成した後、毎年その祥月命日である四月十七日の祭礼に、京都の朝廷が派遣した奉幣使が通行したことからの名称です。すなわち、勅使は京都から中山道を下り、上野国倉賀野宿（高崎市）で東に分かれ、玉村－五料－柴－木崎－太田－八木－築田－天明－犬伏－富田－栃木－金崎－楡木宿で壬生通りと合流して日光に至ります。日光の廟所が完成し、駿河国の久能山から家康の遺骸が日光へ改葬された時も、相模国中原（現、平塚市）－武蔵国府中－川越－館林－天明（現、佐野市）と、この道筋を通り、江戸を避けております。

さて、書状の内容に戻しましょう。冒頭部の「鹿沼」は、略図に見るように、壬生通りに属する宿名です。智仁親王は、四月二十日に参詣を済まされ、翌二十一日に日光を立ち、二十四日には江戸に帰着されております。この間に、鹿沼宿を通過（或は宿泊されたか）された際に、十七日付けの政宗の書状に対する返書を認めさせ、宇都宮で待ち受ける政宗に遣わされました。その書状は直ちに政宗の許へ達しました。その親王の御返書は、政宗に驚愕と失意を齎しました。が、政宗は直ちに道中の親王へ宛て返書を認めましたが、上記の手紙です。明年、京都でのお目見えを期待する政宗の気持ちが伝わってくるような手紙です。

討議要旨

福田秀一氏より、政宗の手紙に対する智仁親王の礼状が残っているかどうかという質問が出され、これに対しては、智仁親王は筆まめな方で、他の手紙をも含めてかなり細やかな行き来があったと考えられるが、現在のところ宮内庁の側には礼状の控えなどは残っていないという返答があった。さらに福田氏からの、親王と個人とのやりとりは他の大名に関してもあったというが、特に政宗の手紙を取り上げたのはなぜかという問いに対して、発表者は、政宗が有名であるということと、大名と親王の境界という視点から考えると、親王の動く道筋が政宗の方に近づいていく点が面白かったためであると答えられた。

武井協三氏より、当時の大名が参勤交代でもないのに、このように日光など江戸の方に向かって出かけていくことはよくあったのかという質問が出された。これについては、智仁親王との関係故の異例の行動だったのではないかと考えられる、政宗の親王に対する特別の思い入れから思わず飛び出したということが、手紙の内容から読みとれるのではないか、という返答があった。